

会議名	日本畜産学会第 105 回大会
開催日時	平成 17 年 9 月 9 日（日）～10 日（土）
開催場所	札幌コンベンションセンター（札幌市白石区東札幌 6 条 1 - 1 - 1）
主催者	社 日本畜産学会
参加人数(概数)	約 1 千名（推定、一般会員 500、学生会員 150、会員外 350）
1. 会議の概要 (500～1,000 字程度または議事内容の資料添付)	<p>優秀発表賞応募 33 を含む一般講演 375 課題の発表、3 のシンポジウム、ワークショップ 4 のほか一般市民を対象とした公開講演会が 8 会場に分かれて行われた。一般講演の分野別割合は、おおよそ栄養・飼養が 30、繁殖・生殖工学 14、形態・生理約 16、育種・遺伝と畜産物利用が各 15、管理・環境 10% で畜産経営 0% で、前回より繁殖・生殖工学が減り、栄養・飼養が多かった。</p> <p>今大会では、一般講演をポスター発表として 2 日間にわたり討議に正味 4 時間を宛て、大ホールの 1 会場で行われた。（別添の大会講演要旨集参照）</p> <p>報告者が出席したおよびシンポジウム および一般講演の中から主として調査した栄養・飼養（第 ）と管理・環境（第 ）会場の演題について報告する。</p> <p>シンポジウム は「食卓・健康・環境と畜産」（座長 島崎 敬一氏）として、生源寺 真一氏が「現代日本のフードシステムとその課題」で年間飲食費支出 80 兆円を支える現在の日本フードシステムにおいて最上流の農林水産業は 2 割に過ぎず、グローバル化は食料自給率の低下に直結していることを指摘した。これを前提に、畜産との関係を念頭に、食品と農業をめぐる今日の問題について整理し、偽装表示の背景と教訓、トレサビリティ・システムの意義、畜産の環境問題について消費者の意識や行動と関連付けて話され、この中で飼料自給率 35%、粗飼料自給率 100% 達成は可能であると述べた。他、次に、唐木英明氏が「食品の安全とリスク・コミュニケーション」として、絶対安全論と実質安全論との間で合意を得られていないのは、TG 食品、BSE、食品添加物、農薬など限られたものであり、とくに、食品安全委員会として取り組んでいる BSE 問題の本質に触れて説明した。それらの問題の解決はリスク管理者の信頼を高めること、関係者の協議の場であるリスク・コミュニケーションあること指摘し、その失敗と対策について述べた。総合討議は行われなかったが、両氏が委員として参画している問題の中身の情報は、初めて耳にする聴衆には強いインパクトを与えたものと思われる。</p> <p>優秀発表賞は、大学院卒業論文発表の場として定着しつつあるように感じられ、女性の発表が応募課題の半数を占めた。この中に、栄養・飼養と管理・環境関連も数題あり、その中で直ちに実用技術に結びつくものとしては、放牧牛に対する圧片コーン給与、定置放牧における放牧強度と草高の関係、などがあったが、画期的な発表はなく、優秀発表賞に選ばれたものもなかった。</p> <p>その他の一般講演課題について、栄養・飼養と管理・環境分野で特に発表が集中した研究領域はなかったが、発表の多かった領域は技会プロによる飼</p>

	<p>料イネ(稲発酵粗飼料を含む)、放牧(耕作放棄地を含む)等で、次に、農産・食品副産物飼料、機能性飼料などで札幌での開催を反映していた。自動搾乳システム、哺乳ロボット関連も数題見られたが、BSE 関連の発表は少なかった</p> <p>それらの発表の中で、帯畜大、道立畜試、関東 4 県共同、鹿児島県畜試などから報告された農産副産物・澱粉、肉牛肥育期給与水準などについて、実用的規模で行われた試験の成績は、そのまま現場の実用条件で参考にできるものである。</p> <p>ダチョウについて、帯畜大から飼養試験成績が報告されたほか、宇大から内分泌関連の基礎的研究成績が報告された。当協会事業の委託先に死蔵されているデータがあり、整理して公表させる責任があると思われる。</p>
<p>2 . 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表</p>	<p>・発酵リキッド・プロジェクト研究から豚の消化管内様相について畜草研の3 題ほど報告されたが、飼料自給率向上に関連し実用上からも注目されている課題であり、成果の取りまとめが期待される。</p> <p>・搾乳ロボット(自動搾乳システム)関連で繁殖成績、血液成分、行動、行動制御に関連するものが、根釧農試、雪印乳業・酪農大、改セ宮崎牧場から3 題報告された。酪学大(堂地)によれば搾乳ロボット管理で繁殖率が低い場合、高泌乳に見合った飼養(飼料)管理が課題であるとのこと。</p> <p>哺乳ロボット(自動哺乳システム)を用いた牛の哺育試験成績が改セ宮崎牧場から報告されたが、世間の関心が高いテーマでもあり、導入した各機関からの報告が待たれる。</p> <p>・黒毛和種去勢牛について、群馬畜試が早期肥育開始により 26 ヶ月で仕上げても良好な肉質成績が得られたことを報告したが、より規模を大きくしての追加検討が期待される。</p>
<p>3 . その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>当協会から委託した研究費による成果関連として、・脱脂粉乳の利活用について九大(六車・平成 15 年度)、・乳房炎関連の早期診断キッドについて(有)トッケン(松江・平成 13~14 年度)、・牛ラクトフェリンについて畜草研(櫛引・平成 14~15 年度)、・乳房炎起因菌の PCR 法による解析システムについて理科大(安部・平成 14~15 年度)の発表があった。それぞれ委託費の金額に見合う一定の成果は得られたものとみなされる。ただし、それに対する謝辞については更なる指導が必要と思われた。</p>
<p>4 . 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>・現在のわが国において、高泌乳牛の飼養管理に関する研究が不足しており、当面、1 万 5 千<sup>千</sup>〇レベルの試験を行える研究課題の採択が必要と思われる。</p>
<p>5 . 報告者</p>	<p>針生 程吉</p>